旧大乗院庭園の調査

－第424次

1　はじめに

奈良文化財研究所は、㈶日本ナショナルトラストからの委託を受け、復原整備の基礎データを得るため、平成７年度より継続的に旧大乗院庭園の発掘調査をおこなってきた。今回の調査は、その成果に基づく西小池の復元整備工事にともなう補足調査である。

調査地は西小池南西の旧建物基礎内部（西調査区）および西小池の南池東岸部分（東調査区）の２箇所である。調査期間は2007年９月10日～９月19日、調査面積は27.8㎡である。このうち、西調査区は第390次調査（2005年度）で検出した鎌倉～室町時代のSB8983の西側の続きを確認することを主な目的として調査をおこなったが、近代に標高89.5m付近まで大きく削平されていたことが判明し、顕著な遺構は検出できなかった。したがって、ここでは西調査区の報告は割愛し、東調査区の成果について報告する。

2　東調査区

第310次調査（1999年度）および第352次調査（2002年度）において土層観察用の畔として残された部分だが、西小池南側が大池方向と池尻方向の二股に分かれる岬に位置するため、汀線と護岸状況の確認を目的として調査をおこなった。

基本層序は図191に示すように上から表土（①）、現代盛土（②）、近代客土（③）、堆積土（④・⑤）、護岸時の盛土（⑥）となっている。⑤層上面で土坑を検出したが、土坑からは近世前半の軒平瓦が出土した。

⑤層を除去すると、調査区のほぼ中央で護岸の基底石を確認し、汀線を確定できた。護岸は、径約20～30㎝大の礫を積み上げているが、大型礫の下には小礫が大量に確認でき、裏込めをしながら比較的急傾斜で礫を積み上げたことがわかる。一方、池底には、径約５～10㎝ほどの小礫を敷いているが、敷石面は基底石から1.5mほど続いたところで途切れ、そこから急激に池底に向かって深くなっている。

3　まとめ

今回の調査では、西小池南西の旧建物基礎内が近代に大きく削平されていた状況および西小池東岸の汀線と護岸状況を確認した。昨年度までの調査成果と合わせることで、図192のように西小池の全体像が明らかになった。

（城倉正祥）

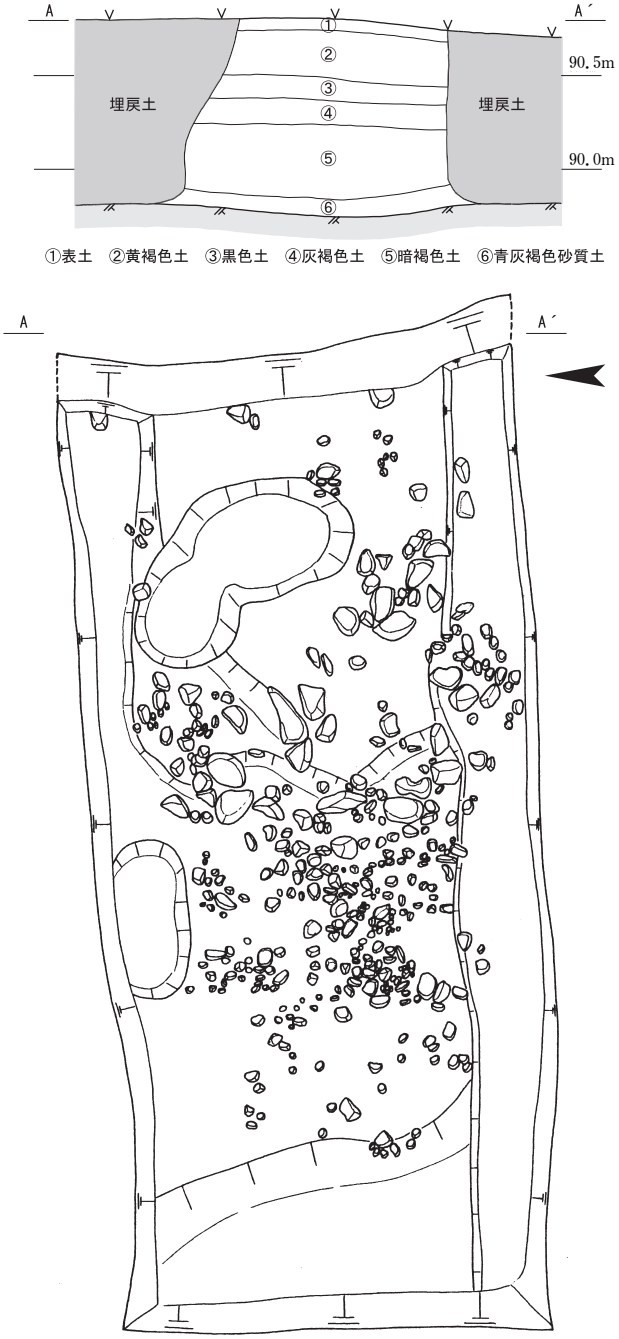

図191　第424次調査遺構平面図・断面図（東調査区）　1：40

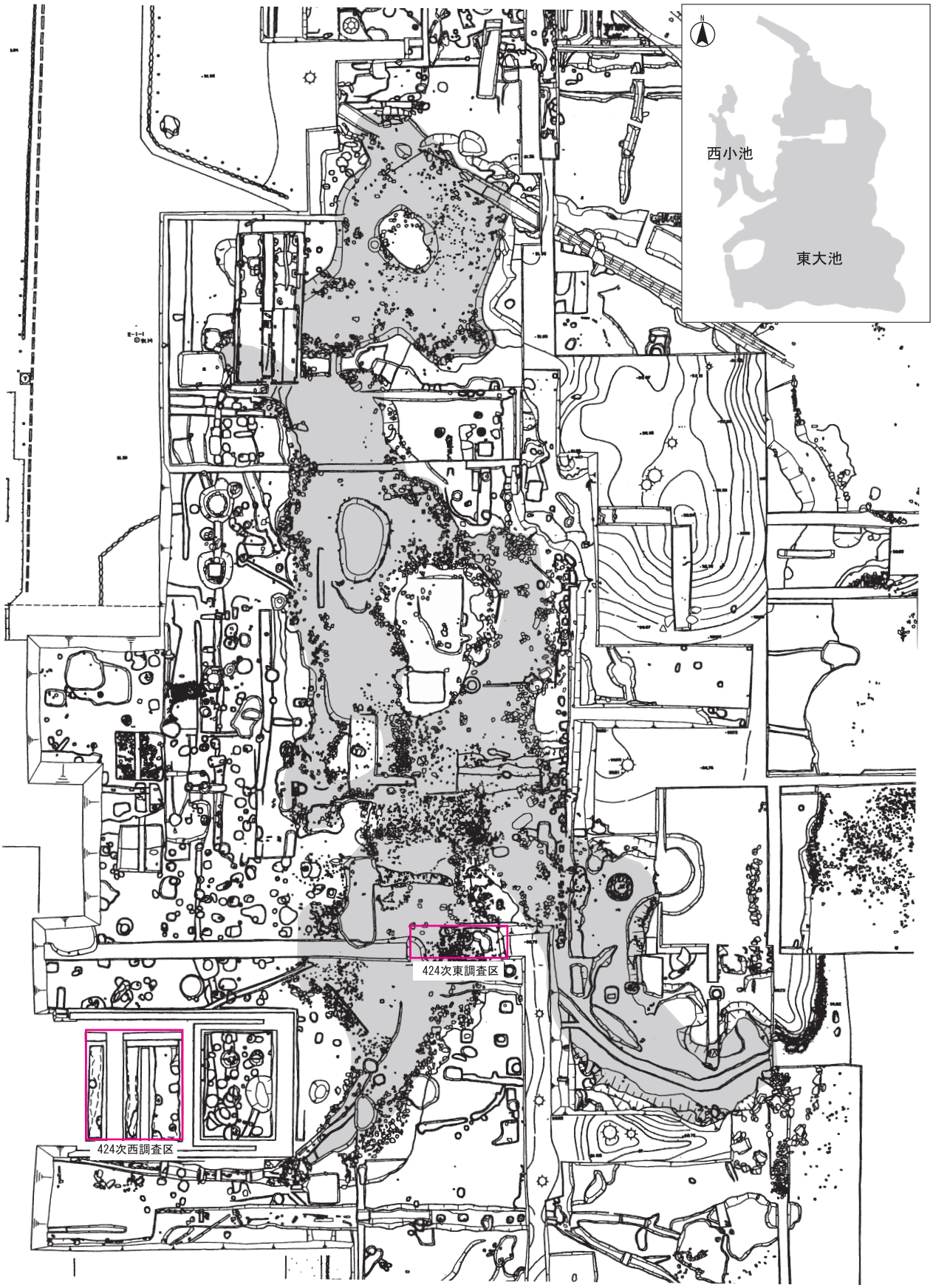

図192　西小池全体図と第424次調査区の位置　1：300